流行百家發句集 上

911.3
イ
上

一事百古撰

流行百家發句集

江都書肆　千鍾房發兌

春花ありて夏はほとゝきす秋
の月冬の雪をなかめて四季の風雅
これ天の時地の利なり　然は
人の和はいかなる事を古人は國の
風俗とかく云へる其時々の好む所
漢林にも芭蕉翁も随意に詠し　是を
人々のまなひ集め歌句の集となしおさ

坂上の州様の名を[illegible]にも松
[illegible]の名所大江戸より隅田川神
飛鳥山[illegible]松
川[illegible]下つ[illegible]野[illegible]黒髪山陰
奥の松島[illegible]風[illegible]の[illegible]川
[illegible]名古屋の[illegible]人
[illegible]岩[illegible]の

春は花[illegible]めづらしき富士[illegible]の山
武蔵野の[illegible]松[illegible]名所
[illegible]隅田川[illegible]
春の[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]一瞬[illegible]
[illegible]集
と帰[illegible]

此寛年時なる人に此浪々なる人にし
秋をおもはしむ狂夫
于時寛政五年の七月　翁山
半嵐庵

百家句集序

夫古道人を我俳境の奇才なる者に一覧一囊を集して
いてる所をつらぬく人を鼓舞し宗眼其の琴を抱く
といへども此筆との囊を我家に窺ることを得ずして人
東の北宗匠より一葉ずつ送られば其囊を出して
秘蔵家の句帖の佳作我名にみえし此集毎子等
編集にして百家集と号し其に前辞を添ん
下我にも全謂の九道人各国を経歴し
須磨に松風を観し吉野に花を恍して
知り句稀和漢の友何ぞ唯百家なるものならむやと今号すら

雅を作るもののたのしくハ阿婢の識をたゝぬのまゝさらんや
是ハ唄ふ口しく後の花に先き桜のいま又後の月見ん
折ふしに書画の家ニ数百家集を撰ぶる事を告け
嗣子の遂にあへると余に譲りしていちの筆をを執る
是人ハ老して拙の以ゝところを勉めハ一書ともなさん
風俗の世に行ふ舞ふへし

嘉永三年冬日平安隠士題して識

雪門主

流行百家叢句集

一車百古編

春之部

正月

正月にかなりまゝりの□の□ 可樵

正月や奥て扇をまつ元 素兄

正月やおもしろみるも尺上尺 似蘭

正月やまさ鶯房の揺籃屋 杜鴻

正月や皆めさしる自料理 九起

元日

元朝や耳の井戸事照る葉哉 梅室

元日にあらたまりたる年の世　西馬

元日や何としらねど又いはふ　万像

元日や名あるもなくて旅とゝろ　石外

元日や一市に分かれて福回來　而后

初鶏

今朝の鶏に勝りのたしかなれ　遅流

初鶏や紫宸の前や若夷　双鳥

もつ鶏や宿の戸ばれは早やり　醒花

初鶏や肘くまる眼をとりかえる　松蘿

初鶏やうしろふさ岸のはさの声　為山

初鶏

初鳥ゆかりは連のせ来なかり　詠久

明くらのくるさ鶏や初かしき　吟雪

夜ふ宿りして明る夜よ初鶏　玉芝

今朝よるも出る宿の夫婦鶏　布丈

左右に来るはちちと鳴もつ鳥　双鳥

歳旦

来しかたや家世の家の瑞あり　月底

当陽にあらたまく來の春　西坡

わか鶏は庭もまた行く千代の春　丁加

扇なもれかりの明け日　默阯

書初の中に雲へ入ろう　初暦　養兀

年礼やうちの亭の出て参り　可后

一軒ては宗匠は[illegible]　出中於

らしや扇子のせる扇　名　如雪

茶乃さしとる春雨の神　閑那

山し間を出て木末の[illegible]くらふ　華阿

初さ[illegible]まえて続ん海　祖白

座頭や川よりの瓜の蛍　百六

この花[illegible]ふ顔やよし買　柴雪

去年や先ていろはも刻て居る　季鳳

[illegible]山してむしろの蝶も雑[illegible]　曲平

菜和や山[illegible]さそる蝶る　世岐

松風も陸子ひと[illegible]初　蔵年

宝引に负て淋しや鐸の汁　宗賦

松空

竹とろ出まつて[illegible]初ふ出　名山

初宮や石[illegible]柿の上　山子

あつるの[illegible]にて宝もろふり　中雪

初日

春山むもいと[illegible]年よしや初り新　松竹

さしゆは猪かやしらり古の日の出　清粋

春まてり翁[illegible]新　緑久

明の[illegible]風の御や名の日出　茶山

年月も春立のちからも初日かな　容斎

初寅

鞍馬からくる一村や初寅　芹舟

さくら時分見分かるや春の寅　木谷

はつゆめ

はつゆめやうつゝにおもふおもかげを　杣雨

はつゆめにきいて見ふしきにかゝり　暁紙

はつゆめや門よりきたる結の書　可吉

若水

若水やまつ汲あまる浴と一ほとけ　琳堂

汲む水や氷りしまゝの絹縄　山子

若ゆるむやくみての家の記　常丈

井筒のきしや切さしてあふれけり　稲雲

恵方

門人もつゝまれて恵方参りかな　山方

性ゆかし来るや恵方の空の色　佳矢

草の戸や揃ふに恵方松　丈翠

松かざしまつりて恵方参りかな　松通

門松

門松やせふあつらへしきまつり　鳥津

門松や松のふさはし秋のさま　南く

門番のきさらぎや軒の八千代　江宗

游

松立てゝくらしうする新家かな　一具

明けれは静さよつや松の竹　不除

蝶もまたせはしき又鎌をしや松の内　波都

久しき家の游乃客よ逃なり　以芝

鶯さもりやかかひよ出るふもの飾藁　出也雄

鶯かもりを打かくし又拂しおとりけ　梧不

鶯こもりの結ひはてより竈の名　木堂

裏白

うらしろやかくしうちをいふまし　雅雨

注連の内

つまらしや夜の角まく注連の内　万保

蓬萊

蓬莱やうつくしき人こゝ給ふ　桑宗

蓬莱や人の側はしさ蓋うけ　山方

蓬莱や名にうつむる花の色　芥舎

ほうらいや蝶家みかりの一雲　杉通

屠蘇

屠蘇の盃や一座ふしかや屋蘇の蔵　梨堂

屠蘇やの屋蘇蓬莱の扉まくし　交水

萬歳

万歳も給うけるや古新年　一具

万歳や義をもちかへり餘所へゆく　菊園

万歳やいつみてもしろ新　義秀

松立てゝうしろ見ゆる新家かな　一貝

門かれは静かなり松の竹　不倦

憎まれし世は又結ぶや松の内　浅都

餅

夕風や家の餅乃香よ纔なり　河菴

搗きかけやかさねて置し朝餅　杏や雅

搗かけを並べて又搗しめたり　柏石

搗きかりの餅ひきてかり筆の名　呉整

裏白

うらしろやかしこくもいはふ茂し　雅雨

注連の内

つましや夜の笛さし注連の内　万倦

蓬莱

蓬莱やうつくしき人に似て　無宗

蓬莱や人倒れし古き家のけ　山方

蓬莱や見つめる春の色　芥舎

ほうらいや嫁菜なりの一盤　梅通

屠蘇

屠蘇の酒て一家に幼やや屠蘇の酸　琴堂

先づやうや屠蘇蓬莱の前まゝし　交水

萬歳

万歳をけはやこの新堂　一貝

万歳や義まりちらしかな　菊園

万歳やいつ見ても面白き新　義秀

万才みあかのかたり草の尖　未成
万歳に鶴亀かけり柳かな　琴堂
万歳や家の先まで見えし也　厭花
万歳の扇子をぬすむ人もあれ　白丈
万才や鶴亀はなるゝけり　此松
万才の翁ふやい満春かな　楓下
万歳のあまつひかりや出しかな　溪斎

猿引
猿引の顔にも春やきたりけり　松什
なまし竹の杖をもつる猿まはし　菊古

羽子
きり羽子のたつむや空に星一つ　詠久
羽子板や春の顔のかけの春の空　西馬

着衣始
市陰の梅のひかりかな　万像
あらたまりに仕まりして着衣始　一心

子日
絵たるまき雲や子日の松の嶺　芳英
小松して引山あい思し初子の日　白丈
見てもいく文川の濱子日かな　九起

小松引
春たちに袖もみどりや小松引　杜水

人日

徒にも入日や小松売りもの　世皎

日おさして行くに売り小松かな　山松

人の日や節は梅に継ぎたしの　閑那

人の日やうかと日暮は雪あちら　其通

人形日や雪もさちらき庭の跡　布文

若菜

摘む若菜人もまじりて若菜摘　梅曲

なりやせきかね若菜かな　英泉

若菜摘梅ありけり家つづき　山字

芹

芹摘に付てふくらし家の前　滄川

垣わきてちらくおよ松若か　李風

むつましき宿の梅や芹蔫　義香

薺

足りるのなまれちしめや薺つき　松竹

梅つまみうちならぬ薺かな　梅思

薺うち節もらくて庭守る　文永

しらぬ家に生まれうち薺　箕園

若草

若草やきのふ松引し所の跡　李暁

わか草の錦湯の跡の霞かな　等哉

春七

若草やきえ残るゝ小一寸　其然
若菜や波路の草も結ひ捨　烏洛
宵の雨うに行へて来るき手　柏石

爆竹

香きえし中て火ぞかゝる人ごゝに　竹句
早ひとふきむやともる遠火ゆ　琢堂
左義長も打つゞくや岳の松　佳笑

藪入

藪入乃跡しても去し老の柳　太乙
やぶ入や家も清らに掃かくり　文田
藪入やかゝる浅きを二日うけ　松醇

藪入や其ゆかりしる旅すゞ夜　杏年
やぶ入の油がまゝ折や麦斗包　白桐
藪入や他人気ぬ風呂の縁なし　如雪
やぶ入や川うら路ハ猶ながら　李風
藪入乃足拭しを出度ゞ脚　未成
やぶ入の梅結ぶや上り端　梅雉
藪入乃きせ待給て而さくなり　可然
藪入の返ていうきん付抛ゝに　百古

余寒

法えとをきしの梢さき明なんゝに　盛年
燈火打のあふもあらぬよるそれ　舞市

宵しれ月てらしと残るかな　不染
桐の実ハ雪てもこゆる余寒かな　大西
梅壹る寺町ならぬ乃よまんれし　杜水
平のものてても出る残雪哉　琢瑜
若淡ハ残雪の積おとらゆる　浮芸
宵れ舟をひくる年もれ　普陀
男ろしひ返つぶめかりよんれ　梅雅
畑乃粉のちる其のかな　筌古

浮返

野出折ふ日ハうしまでつる　李曉
跡の雨や晴んと出れハきえる　月坡

井戸の雪しまされて流るる　如葉

春雪

降らちおちこしそらりや春の雪　梅石
静ふくやさへ浮まよる春の雪　椿雨
物らうけめくちおち添めや春の雪　湖静
言もいとさくさる降や春の雪　蛟年

淡雪

淡雪や日のさすかたく見ゆ　稀遊
淡雪ふ大あひ乃ものちられ　筌古

雪解

雪解や母乃尊のかかり　隣山

霞

雪とけて残るおもかげ水の笹　錦糸

雪解や晩鐘のうへ叶町　杜水

游蝶を一羽見せし霞かな　蕉雨

ひと霞ぬらくら海てる入日かな　瓢宙

夕気配起きて傘のゆきうれ　李湊

冬枯て奮の雪も霞かな　宙々

夕られやならし宮ても清水む　宗季

霞しく森かくしける霞かな　松島

一本の松よ雲ばかり霞かな　狐舟

飼馬して野餌してかる霞かな　甘古

出し旅も柱に任せつゝ霞かな　緑々

桐の実は何にもいふまいや霞かな　義香

霞まねは峯のつゝみさむしの露　竹詞

かくれ来て霞まさ庵る松ゆかし　錦城

霞うし野に霞かふ律まろし難波山　世時

暮る山きし風のよみ夕ぐれに　乗丘

お廓おまひまかり霞すみ　桂秋

青かるは松の宿やかぬまへ　稲海

八重霞一方は川の手がれ　古通

人しらぬ此市にや夕霞　清府

かまくへ干も霞をよつ森　松濤

名さへしる宴をつくる入日かな　西坡

陽炎

かげろふや出行かんまゝの茶臼　秀舟
陽炎や軒ひつや芦をいる虫の跡　山方
うけるふや後もなれきる宅り　丹司
むらしさや陽炎のかゝる子流れ　文琴

あたゝか

霞の浦かくしてあたゝかに湊かな　甘古
山越え四への日てふめるみかり　仏司

永日

暮れかけて日永き春の小袖かな　莖古

水をぬるみ山まで日永かし　宗雪
木挽乃おとや日ながき庭のおく　去や枕
人つくねんと日永し一日つく　弱左

東風

初東風や磯の千鳥打寄る　梅室
初東風や何をせしこのほとり入　あゐめ
初東風や床もゆかしき帰らう　未蔭
東風ふくや梢に音を見出しさ　莖古

春風

新むしつゆるして吹きかへる春の風　文一水
春風や柳原の中し声　下知

梅

春の雨柳暮屋の明を消えけり　燕羽

新新の白きまむ梅の白さかな　閑那

夜の出る方か野梅がおもかれ　連定

地よ流く雨の助りや梅の茶　燕菊

戸あけるを待や何ぞ梅の風　秦泉

梅さくや梅まで続ける花瓦　竹塘

家の灯る光ものかなう梅乃花　麸山

まうさく梅の雛しらかの香　杉舷

古寺のひかりの除夜や雪の梅　共山

春や世の人はともに梅は香　雨橘

春

春雨

寂や木の色昼も春の風　吟雪

行き来る人に春風の提の花　白鳥

梅藤屋の打扱おそし春の雨　未成

春雨や山田の路の通れもし　折揚

花の跡て出てあひて春の雨　吾雪

松葉ふく軒のしづくや春の雨　幸水

春雨や結ふる空田も見えて　泰丘

野はくれて山の眼し春の雨　李暁

峨さかや春の雨木の葉眠る　此松

春さめや雨して晴き靄　才乞

色かへぬ梅にさそはれし草庵哉　松清

家の梅人あるほどの花ひらく　李乙

去年の時分や代に梅一枝　此村

此頃は梅さかりとは嬉しけれ　孫漆

春の夜や梅をかついで人ぞつく　尺雨

そよと吹く二月ぐらく梅の枝　可大

出かけ梅やまたたく旅の山の春　吾雲

御出しの夕々に畑や梅の薫　京成

杉並し梅ぞ初夕や此殿より　梅羽

ひろひろりひくる梅が林あれ　石介

咲やちらしてまつりのうらし梅林　松竹

梅一木さくや草庵の見とりまわり　雲屯

道に梅ていたわるまんと梅の中　杜水

多くの花と見えたり梅の中　世岐

あさハ出る朝のゆふへも梅　玉芝

梅桜も色あり桜もあり木国　素兄

梅は月ごしん中より出て居るし　宗年

一面さくや月夜の梅の春　猪山

梅の梅月のさらくとかく　寿鶯

耕代かり私しん月と梅　義貞

松竹の座像あらて梅の花　岩釣

画し何こ出て梅が梅のさき　松室

柳

見えぬ字を抄つくや青柳　鵜く

緒よく達する家の柳かな　四端

青柳にかゝる舟の乗さかな　柳曲

碧ありのちらつて出る柳かな　一游

うつりには乱れまじるやふさかれ　月山

柳ふくるゝやゆらんかられ花　芳英

舟出てみしよくありし柳哉　稍立

風先や流るゝやうに青柳　歪家

青いはいえちゝの家の柳かれ　告眉

第柳の糸とふ結む帯の条　五桐

松の根の流るまでふく柳哉　青楼

七八分まで見ゆるやあさきのあ　万係

青柳や山しく八重に秋を報　色洲

柳さや一流つゝる添めうれ　立宇

折々かけふもあらゆる間のさし柳　杜水

ちりもくはつゝのまゝの柳かな　柳塘

青い香は小家の柳算えより　寄舟

青柳にはまゝららぬ根吹かれ　君富

かのあるうつく風やて柳かな　富紙

旅と山ひまましうやあさぎ　汕蕉

古木にも山を枝かりの梅かれ　研花

またらんに青みて柳や夕境　素石

椿

さ琴の嗚をはまれ柳ノれ　杜洲

りかをり椿よささや生来　路池

濡戸坂やまかりし峰の赤椿　圭流

沙瀬の匠居あしらひ椿ヶ梛し　隣山

日の恵や椿くよう帆上り　不睬

笑耳ふ椿の花る角ヰ那　碧花

青もさん椿ちりふや庭松の上　結沙

角色よ崖のあちらり花椿　世波

野老堀

堀ヶりて垂て人あさき野老ちふ　寺三

麦人も赤八尺出して木立栽　一貝

下萌

下萌や一川もかくして角上り　砥鳥

冬枯し不分もきけと花りなく　多よわ

気に花やものを離れて咲る頃　四端

土筆

男なり花繁き岸に生え　有情

角り絶をもうし岸のかき垂り　月庵

防風

防風やあきこへ猶く野の色　紗葉

猫恋

出の人ゆるあくろあも猫まて猫の声　二燕

猫乃恋やむとき閨の朧月　盛年

白魚

志ら魚や見るを哀しく堂まれん　菊圃

しら魚の水にも白く出すひかり　吟雪

鶯

鶯や雪間の笑も見て初る　義香

なほ鳴て鳴く鶯あしたより　曲阜

うぐひすも親さんと木影より　都盤

鶯梅に来てうぐひすの声　渓斎

鶯も我来て花大方より　見外

うぐひすや庭てらし露つくさ　菊圃

鶯　きれける風ぬくゝかし鶯の声　雄雨

　梅か丘の里まつ宿や鶯来ぬ　あや旅

雲雀　雲雀ハまだ竹てしもを啼きかり　吾斎

　立らんかあの原て声の上をむかひかかし　吟舎

　あしつ蒲も寄くれ芥くもりかに　未成

　小声の上をあかれぬや雲雀かれ　蓮草

鱒　新堀を鱒のさらん水の間かゝる　稲雲

　鱒りふ日きゝゝさしはの声　四端

　あかり新鱒るゝやあハ風もむし　弄布

百千鳥　咲ける花耳にも挟ねて百千鳥　也雲

駒鳥　也しもきに鳴るの声や陸奥鼓　薫雨

獺祭魚　小耳して獺の祭りもするむかし　旅朗

蝌　鳴きせて秋をしのぶやあゝゝ芭　昇布

　よみかへるふりゝ謙さる坂の神　松什

　左の鮎の尾のふ中しとみ汁　南雲

海苔　青海苔や浮きたる浦ところ　稲舟

　葉をも移て海苔の葉りやⅡの光　雉雨

　川海苔もまつかゝる白ひ泉　播思

帰雁

かへるかりかへらさるかりや雨の縁　烏上志

寺さくらさくらはかへる雁の綾　雲峯

桃さいてさくをつらねや雁のうき　桃色

雲たえて狎しる鴈の後雁れ　芥舍

二月

さらしほや吹かるゝ織る桃の海　定水

梅ちるゝ木かけそへて二月かれ　梅里

空ましへすゝきて二月のてきらふ　木栽

二月夜

ちゝのきさらきのなきや二つの夜　楼凡

正月ののちはつきなり二月かな　楓下

朧月

あかしもあかりやかすみ御月　西妓

船かけし風あくさておほろ月　古風

木陰さくあのよしゝや御月　白丈

おかめてはなしけるおほろ月　迂調

身にふれて松もかすみて雁月　徐々

今宵こそ月のおほろや霞の海　五桐

三日月もかすや松か枝の堀川　素兄

朧夜

おほろ夜や岸をもはなるゝ船の音　山子

御おやひとさちののむしのこゑ　蓬宇

春月

陰雨ふてしかりつゝ梅や春の月　素丸

倚よしハまこと蕎麦さゝて春日月　此松

木陰さへ濡てふちりくゝ春の月　世岐

象えてふ乃秋さや春の月　綿城

人去の沙と蕨折てもつれとく　其面

去ものゝ尾梅さく山や春の月　柳宾

我しき田ハまこと淡くもしき春の月　梅雄

船ゆるさ出たる須の埒や春の月　其風

去羽しそ出る門おもし春の月　有蕉

筆あるさ花ととられて春の月　菁英

附木ふ人も去さ坂やくもれ月　百古

春もまてふ月かゝる木のまくれ　烏洋

初雷

まつ雷を生まむくれ浦の春　南之

出代

出代や吉日いふて兄の森　愚泉

凡巾

凡巾あつら音姫さんの浜のと　曲年

凡巾やおもふも棚ありてある　吉丸

初雨の竹のえさおろすや凡巾　杜将

打竜の浜のころや凡巾のけ　西坡

凡巾のあけさせハ流きや開納　其風

新造了凡巾みおとろく野原かぶ　寸古

こと
まこと梅花凡中をかうて那口京　慈雨
凡中あるて日が続しや桜野町　月底

初花
ちるの花やわかひよろ々々よろよろ　李涼
初花にかたちよし料理やゝ山の皆　一貝

初桜
とり出ありふさ木の葉よりたつ桜　力山
壁入し山によろくしやさらうし　貝外
菊たしふ宗の市よのつきの蕊　素底

苗代
苗代や一日ちとは日と来たも濡る　山子

ふもしろの日来や帯も収まれ　是波

種井
ふりふる人も取々種井々れ　史石
雑池やもうしたゝ池のうし　李涼

菜花
ふれなども河家のうらぞ東山　李涼
菜の花や飛ある川なりたり　吉眉

紅梅
おつ梅や梅の浮きてし家の紐　山子

接木
手もひろあうちつ見えれ桜本紙　寄云

焼野
きのうき焼く野ちるくるまちくるふ　吉眉

蔦若葉　この[illegible]の[illegible]て若葉哉　李晈

燕　飛燕のみちきりたちる乙鳥かな　隣之

世の中は月のさくや宿の乙鳥　孤舟

乙鳥は上くらまてる[illegible]かな　一路

宗一[illegible]上るる乙鳥飛ぶ　百古

[illegible]してかへる[illegible]つくつくふ　九杞

雉子　今啼くや月の河しの[illegible]やきしの声　松出

[illegible]川の[illegible]やきし[illegible]　木谷

きし[illegible]つく[illegible]のなる　閑雲

明るみ時のいたまや[illegible]れ　曲年

[illegible]　陸山

[illegible]山の[illegible]　西坡

雀子　春の[illegible]門の[illegible]や雀の子　件司

[illegible]雀子や[illegible]　一徳

雀子[illegible]　吉凡

[illegible]や[illegible]　石山

帰雁　田[illegible]や[illegible]帰る雁　宋竜

[illegible]　義秀

蛙

星うして夜ハ河かや浦の月　宗辰

蛙まて啼く松の月を聞夜　李雨

居月や蛙ハ何とりはなしけり　未成

流し杉川のとみのまし蛙　晩蔵

情写おしきお野や赤つ蛙　交水

出すし田ほとりの松の蛙かな　大西

鳴さして蛙つ鳴ありとの音　甘古

うらおそる水をたつくかはつかな　西坡

鳴まへの声や念とえる田乃蛙　起径

蛙金尺字の浅さや鳴くまゝ　杜鴻

蝶

咲きまて帰りくるる蛙かな　鳥谷

竹網の様とはらや雨かな　孤山

蛙かす田とし一の露や竹の月かる　山子

白露て飛松むさのなさかれ　壇羽

蝶のうけ頃ハりかのよろむ哉　松清

ちる蝶や幕串まて迷ふ哉　蓬岸

招く金や蝶つ蝶してひらりて　逸洞

本京の花て花香る春蝶もれ　出乎径

蝶の来て蝶あそりかり松蘇　一漁

てらふ一つ字を出ちりかて行かるり　祖衍

川狩　星の影花も飾も引てあり　雞窩

川狩　暮まちの千鳥や鵜の引茂り　見外

田螺　野山にも稼は出る田にし哉　正畑

鹿角落　山深の奥で抜ける鹿の角　如雪

海山　海こゆる鳩ありおとして深き山　嵜三

春水　暮しつ汲よき色深き春の水　丁知

雛かりや酒ひたし春の水　甘古

ゆるゝそこ頼みなる春の水　太乙

深いまり川幅よ深き春の水　九蛇

雛

つゐをつゝの人にまさる雛かな　尺面

老られた顔も見るよ雛祭り　楓下

人よりはそのまゝさきむかしの雛　嵜三

昔思ふ子ちるを思ふ雛の神　山方

よく見れは似て似ぬ雛の内裏かな　杵塘

雛市や雛の小袖の小袖かな　立宇

雛かるや雛一の手習つし　文和

庵まで出て佳る雛も気色かな　二拙

性咲いて女性や柳と雛　素兒

桃

桃さくや川流して消えつゝ　蓮流

桜

桜さきちり桜もちりし桜の下　梅室

雪嶽の角も花さくかすみかな　孤舟

物さしや姫もまいらぬ雨やさき　蘂市

照らし入日の光や桜の花　昇左

見つめて掛し花なる桜の神　而后

桜しるや桜かさきし桜かりく　宗雪

花すゝきさくやの花さきや山さくら　滄川

雨さてもさくらの跡し文桜　梅也

立尽しされしよる庭のさくらかな　梅思

芳野桜の桜まて濡す桜花　鵜鳥

磯きわや桜の角の霞かな　吉凡

物しきりさく桜やちる桜　稀雲

菊ちらして春しくの桜の神　杵坊

桜さくらの花のはしぬ物かし　松や維

名桜やさくらさくる山のさ月　一旅

江多への春もさしむて花さくら　次紀

花桜ちるや泡ふく舞の上　宗堂

花

いひ出てしらぬひとつ花や花の陰　千とふ

見つけれて戻りもさし花見かな　象園

花ちりて夕暮おやき木の間かな　烏洋

けふよりの春ともなりて花の人　松什
はなへ出て曇るや雨かるき　閑神
書ちるを人のかりたる春の中　四橋
ちる花や散りし花も出る中に　佳彩
霞む一日春の日月の神　方清
梅さくや深きの門や春の花　李水
ちる花をそとしる桐はなの花　五畑
春の花や人のいかなる紙の花　州国
そよりとて気まで風しる夕まれ　芸年
春はいかなし出来ん里の窓　安山
まむしびの林つて来るまでに　素庵

てりかへしあさ風や池の波　李暁
雨ふくむ花や木の間の朝の雨　嘉笛
よるを待てはいまにかゝる春さかり　月庵
桃桜てもしてしまを春の人　析爽
又五文字は春の花の月のかすかなり　緑城
春ちるや如のもえあるらむ日暮　芸屑
身の嫁てよそ深くて春の雨　寸古
蛙なく深くて春より花は春さかり　素只
見えるやさき野や花の中　李旗
いさり火て御よむ春の朝　木楼
松風もいかなる春の花の露　雛扇

さ若て花やしけふハ盛りかな　而后
花に寝て人か栞乃川しるへ　宮富
花もおもほゆ浮かる宿る陰そ　恵泉
咲しらてちらぬもちし岩の中　岩尾
花の中行かいても猫か神　稀鉄
花乃おもしろ思ひ過る宿　吟笑
花の戸や嵐の上てちるもしれ　一貝
ちるも一木二木や岩の花　不染
花やかな蝶ちるも盛りの宿　普明
ひとり来て咲その原ら嵐哉　九轍
沢いそく空にひしや花乃上　百古

花の中ひく船も花の宿まかく　烏岩
ゆるくて月泊しら花の月哉　陸山
月に花人よそれ声の舞哉　芥舎

藤

峰ちる水も藤も物は見えぬ　赤丘
一房入しても日暮れ宿の藤　素風

山吹

山吹さや出る水に浮てゆれしさ　稀雪
山吹や浪底へかけみ見えされ　宮富

躑躅

ちもりて照る日影の躑躅哉　閑卿

うつされぬ物ちや花にくつしまふ　亀卜

菫

花しらぬ人ハ坂川の菫かな　島付

菫咲く橋を小づゝや取も山　安齋

三国や浮ミてつくる菫草　硯花

菫摘下女の手用にうれしさ　陵山

此花や菫をよける轍もなし　紹之

木瓜

日の影や風ハ吹く木瓜の花　一旦

辛夷

窓より木ハ少し離れて辛夷咲　如雪

連翹

連翹や咲迄をよく散りし日　羽左

茶摘

摘し音ハ聞えし歯よ茶の香哉　感年

小鮎

浮てうしろ出る哉小鮎かな　山子

寄鮎の影見る浪の流れけり　泰丘

深山木戸奈毎小鮎かな　西雪

蚕

人まねて打つる蚕のさかんなり　松柏

人乃手をたのミにしたる蚕の飢　祖研

忘草

蛍出て菊の上や忘れしも　六蕪

翌をも忘れて寺おもしろき　柏石

妙案　他人にいはれて[illegible]嬉しがり　玉之

惜春　あ出しや[illegible]ふ終の寺　容齋

雜　春の[illegible]つく[illegible]して人の春し　四[illegible]

春[illegible]ふ気[illegible]小[illegible]春　素[illegible]

流行百家雋句集

一車百古編

夏之部

四月

[illegible]傘[illegible]しき卯月かな　杉窓

[illegible]れは[illegible]き卯月かな　山子

家を[illegible]やつと見え[illegible]し卯月哉　孫久

[illegible]緑の[illegible]卯月かな　得茎

山[illegible]おとろしうなる卯月かな　蓮堂

宋のも[illegible]かりて卯月の一ころ　芳英

[illegible]植麦のそく卯月かな　竹舎

短夜

みじか夜も又おもはるゝ夜はつかな　嵜三
短夜もかゝし五月の出汐かな　西坡
みじか夜や明て静なる海と山　森年
みじか夜の風情牛や居るらし　英泉
みじか夜やあけれ始もせぬ機の鈍　芳英
川舟に寝て短夜の流るゝれ　此松
みじか夜や篝を稀に灯もされ　百古
早紙を田より引て夜の明やすき　甘古
明やすき夜に老はたし蛙の声　西后
宿かりし明やすき夜や小田の鷺　李暁
明やすき夜や川舟の出しけし　佳矣
ちゝう浜しき明やすき竹や渓舟　杜鴻

大文字

又おもふ島も燃えぬ大文字　夢鳩
うしろへも照る灯やも大文字　洛芸

蝸

知ら床に錦人の枝に植木　竹丈
一寸へしで上て錦かきれ　月山
山風の蝸牛かゝりて月の夜　石壱
草の葉に芝て青のかたつれ　杜鴻
蝸ゝるゝ蝸や蛞子の起ぬ日　鳥律
起されて先まだ起出すは　山子

涼しさや我性先登までの其風　梅下

扇

杉乃間の清水ある扇かな　蓬堂
ちとの間は角も違く扇かれ　白大
人柄も扇ゐろ小松原　月庵

團扇

団ふゐるみ〳〵つ〳〵團扇哉　松濤
拾清よふ名合や家扇ヶ原　李蕨

日傘

立寄る宮まゐりや日傘　素然
情乃ちをそぞゐる日傘かれ　う扶

よきおくがひつみむ日傘哉　魚泉

牡丹

猫ほども寸猫ゐる牡丹かれ　西肉
ありあも宝寺もあるかんかれ　松竹
指さしてみせしかれき牡丹哉　岩去
月ゐる人ゐ風ゐ最て牡丹かれ　吟年
つゐるゆゐりゑりやる牡丹哉　曲年
徐の春たりみてむりし牡丹かれ　杏乙

杜若

含みゐる角の前しやりきつかき　嵜好
きしゐる又きし紀角や杜若　一具

ほとゝぎすや雨雲越えて来て鳴れ　竹塢

杜若さらに宿かる軒の端　陵山

宮刈りや草のあやめよりまた杜若　芳雲

水ならぬ池も早き沢芝ぞかり　孫城

ほとゝ浅き陰の波立つて見ゆる杜若　湊川

ちる時ぞ露の涼しさや水こぼるゝさ　峰雪

咲き分けて居る垣根たなびく杜若　梅女

罌粟花

芥子ひとへ今朝の姿うつし見の雨　芳眉

かしこさや居しくも濡れて散る芥子　五明

雨あしは日和と見つても今しの花　古乙

梅雨の晴は曇まぬや今日しの花　梅海

新縁に日の出る里やけしの花　西坡

空の様見て出でし先やけし散る　陵山

笠かぶる その背ながしけしの花　青尖

麦秋

山口の中なる出し麦の秋　方像

麦秋や急いで通る市の衆　古眉

若葉

むらさきや我若葉ぞ通る雨　杜水

川添ハ掘りて晴る日の若葉かな　稲雲

なびく日や鳴く鳥も若葉かな　丁知

跡くらひ古の菖蒲も若葉かれ　路池

木かけやうつる杜若の若葉かな　雲丸

持たる宝や若葉の上の露　竹清

栗柿の若葉まじりしむしろかな　素兄

風ふけば若葉ゆるかる影見れ　四鳥

鳥飛んで若葉にさとる山かれ　祖白

枝もなしを合せて出る若葉かな　浮久

新樹

緑陰新樹に涼しき風の音　未遊

[illegible]　訥梦

[illegible]　小栽

木下闇

我の菜の露や木下やこ　桜宝

[illegible]　玉芝

[illegible]　露窗

[illegible]　只両

葉桜

葉さかりや[illegible]　東圃

葉桜や[illegible]　鳥谷

卯花

卯の花[illegible]　不染

[illegible]　遅花

柿花

昨のさめて雨の名残し柿の中　楚左

恋しさに笑ふて落る柿の花　旭相

柿の笑ふ名落る日和もちゝ柿なり　四猿

蝸牛に柿の花白ふしまかれ　西可

祭り

さゝ屋し祭りかゝる浪の跡　珍珠

一棹を祭りの中やよこし舟　素兄

出もせぬ神輿もちかへ祭りかれ　季風

川へ流す神輿は祭りの手　文水

うれしさや祭りの足のかゝへてちらちらと　芹雲

むら〳〵行の右寄へかゝる祭りかれ　杉靖

来る浦でちらちら祭りの神　素居

笋

竹の子や仲條に出る去年の色　醒花

竹の子や枝にくらべり小風呂敷　孤舟

笋に初音の声出ひ夜来庭口　秋雨

笋や親にまけそうね生えていく　杜水

笋やまた見るきさらぎ切口　移竹

竹の子やくいのはや暖をして　素風

隣から竹の子ぬし笑ふ乃中　瓢鳥

竹の子や掘られし親も鳥のなし　可吉

若葉　若葉から一息の山ふかけ　執島

葵　横に日あさしてかりや宮葵　吟雪

鳶尾　きり店やいちはつまでもつつき　好峯

蓴菜　一池をくくりふくむしぬなはか　拙之

海松　みるふさや揺るる浪の玉てつ　鳥岩

桐花　出るつりてこかり知りや桐の花　柳雪

若楓　若楓岸の足の梢見付けり　盛年

楊梅実　やまももの実ありてつくつく楊の実　四端

芍薬　やくやく葉や今朝しおを深めけれ　逸之

合歓花　山しんや宮鉄の咲きはまさくかね　見升

茨花　茎葉の角をも面さん茨の花　柳塊

夏木立　[illegible]の花咲ありまた流れかし庵本たち　岩几

郭公　さはかききみてき井もかとらん　梅宮

木の間にハ鞭の深き声や川あり　下紅

待ちとかく夜中ほ松分のおとらん　嵐乙

揚も葉をつくりやなかり郭公　由年

昨ははひとおかひかけしかとらん　角園

孫なくへ声軽あかしわくとらん　旅久

わくこんを花と人まかひくてけれ　梅雄

乃ほとハ中も秋と庵雪や川分　菜岩

ありかつし雅ろし三寧けて郭公　ろ山

杉のあめに渡りほとゝぎす　浮風

晴しき[illegible]せりしやほとゝぎす　[illegible]

ひとこゑ傘に出有て石の[illegible]　柏石

夜明しも見きしめかし時鳥　竹司

[illegible]あふる川かるさやほとゝぎす　山松

あかるふ杉かるふかやほとゝぎす　西坡

郭公啼や[illegible]に[illegible]も　芸房

きう凡夜のさしらさ上や時鳥　逢堂

梅とさの[illegible]ほとゝぎす　[illegible]

松嵐風の中からほとゝぎす　芳英

そしつきても聴ゆ七かよほとゝぎす　樹下

ゆきていふ[illegible]月[illegible]郭公　鶴池

[illegible]木に瀬を出る月やほとゝぎす　凌宙

閑古鳥

宮古[illegible]や[illegible]閑古鳥　[illegible]

[illegible]宮古鳥　[illegible]

[illegible]閑古鳥　[illegible]

行々子

三股に[illegible]行々子　柏石

[illegible]行々子　高阿

枝柿

いつも[illegible]枝柿　月庵

さし汐く魚もなかりけり杉櫨　祖白

初鰹

此味を鰯ハ忘しき初鰹　菅奐

末を志る身て作られ初鰹　多少

螢

仮寝くる家にふれるや蛍狩　南々

家鳴く夢かりけるとりおとる　泰丘

首のしつ笠にハ入て行螢　桂秋

面憎や千畳もしる飛螢　杜鴻

黒人々清泉の中にあるや飛螢　不深

むらの葉に生の背てらし螢かな　曲年

川添の家や夢なし螢家　甘吉

治し我ものいやさしの首　孤舟

庭掃しくれ併まるや飛螢　素庭

呉ひとつの田をてしきておけり　石外

笠にかや宿らかつそ家うたて　九起

蝸牛

杖先や角ありしけのさんかり　西坡

雨まくのさ居ちまかりけり　洛梓

さしふるらし角ふつ入ぬり蝸牛　此松

蚊

蚊とやしや探りあつさ竹毅　然々

蚊遣

宵の蚊も一先寝りぬ庵の香　松什

蚊遣火に付て家の立去れ　平烟

更けりや蚊の音ゆるの窓の月　移絲

庵の蚊もちるや稀な焼筆残売　稀山

足にかれハ家の庵や蚊の打林　霧左

雛子あふらつまむも立ち居ぬ　善古

手にふる猪し参も蚊蚊中の家　下知

古池の中の庵ふ池る蚊遣り　雅舟

似さし月ぐ庵ふる蚊十り虎　雲暁

横付るや蚊の蚊遣りの壷愛　野花

燃えて大波絵も蚊中の札　前雲

秋篠抹出して蚊くり　移絡

家出して一間あてる蚊中の家　淡気

篠も繁る蚊遣りの煙ぐ　路池

孑孑

筒そのふ戸に直て孑孑あらたり　此松

孑孑や何ふ生ても世ハ渡し　一畏

鵜

いざよふる川の鵜の飛や篝火　烏津

出でよりも夜の鵜の篝の角　玉虎

絶む鵜やうへをつゆぬ渡り愛　竹圓

山吹や下り船舟の出所 杜水
ましみにみりて布かし船の角 世岐

青簾

青簾や形まね松の下かけ 紹之
青簾や盛りまでより遠ひ 交水

蝙蝠

蝙蝠や暁(?)ちかつく古寺 烏谷

飛蟻

元(?)きよりの手や(?)飛き飛蟻か 百古

水馬

水馬(?)流れてふる(?)根まやふる 白丈

更衣

衣かへわり(?)まで生(?)たとく色さ 関那

縫てもよ祝日を老の衣かへ 柳下
花ひとせい袷とまでなりぬるかえ 延水
袷まきの沫かせとて衣かへ 李想
旅人も四五日おくしてころもかへ 竹司
松みけも(?)そのまゝの衣かへ 吟雨
柳ましぬ(?)かくれ(?)は衣かへ 松思
夕川流る松のちりや衣かへ 清角
衣かへそのうへ(?)とも人もなし 由誓

袷

ゆふ(?)ぐれ(?)の影のゆくゑや初袷 孤舟
情ましい出(?)くふ(?)さゝ袷の外 山言

鯖

舟遊びもなくしまつ鯖　松宗

はしたてしかゝりけり初鯖　世岐

むしろおして鯖の数読や初鯖　宗成

川口の日に売るゝ鯖の衣　使余

風さ吹く瀬もしらぬ鯖の船　源久

釣歌はまさしくもしらぬ鯖の沖　仙景

さそわれてよるの先初る鯖の丸　理花

かつを鮓や秋の一葉も生ひて　篤古

きしるるて鮓の市から舟かゝり　布丈

今浦の秋をよしらて一夜鮓　杜晴

もし漬て宵て一夜鮓ゆかり　春樵

あかの能も鮓や鮓かしく　山方

青さし

まさしや宮扇まさに拝む枝　一具

まさしや酒さ能く様の娘　山子

漬併

漬仏のそれにしもあかは深き丸　史埜

むしろ世の花も雨のふる仏生会　杉竹

本堂の秋の併の春の家　冷来

葬も二漬かまりぬ仏生会　梅雄

花菖蒲　[illegible]　彩雪

夏花　[illegible]　高[illegible]

青簾　[illegible]　鳥岩

[illegible]　雨可

皐月　[illegible]皐月られ　桜里

夕[illegible]皐月哉　滄川

幟　[illegible]や幟の[illegible]　山可

[illegible]幟られ　宗雪

庭[illegible]して田植[illegible]幟られ　李暁

[illegible]　一徳

[illegible]　[illegible]や[illegible]枕かな　山方

[illegible]の[illegible]　峯雀

竹植　竹植て[illegible]夕心　西可

[illegible]竹の月　芳英

五月雨　晴[illegible]五月雨　萬圃

[illegible]　不染

五月雨

降りしてふつりと晴る五月雨　瓢翁

其翁の引つゝく庵やさつき雨　路沈

香ぬるき月日の中よ五月雨　万像

絵つゝみ紫ゝりし五月雨　梅宝

取りる雨や汐の引ふち手のとしき　曲阜

さみだれや梓ても流の精　呆毛

ゐやちまて山路ふられ五月雨　羅市

諸の声れまてをしつや五月雨　梓塔

杣とつ木をたゝ流れやさ月雨　以暑

ありるハかゝても水の五月雨　然年

此の雨や五月雨しるの気の　松濤

さみだれの川庵そ降る汐まで　古乙

あくゝ

黒くゝや梅の粉も扇に　羅市

五月晴

不知ノ入る名を赤し五月晴　柳筮

菖蒲

椀さく其るの菖蒲哉　甚通

戸口の笋をあてゝ菖も　交水

軒はさしての声きく菖蒲か　杜蛤

ニ声らし菖蒲をわけて　拙秋

菖蒲湯

菖蒲湯の... 通るなり　狐舟

河上の社に汗も菖蒲の匂ひかな　雨那

田植

乙女子の来てしまひけり田植かな　太乙

植る手も雨てしづまる田植哉　一湛

に植ゑし田ともおもはれず鶏も　雲舟

植てまた来ぬ田の見てふ袂の花　聴秋

夕日も秋の波追ふて行田植かな　記山

通ひしふ畠のりちかふ田植かな　桂秋

早苗田や植付られハひとつ径　山子

下り月や植る日の田の白ひかな　立宇

早乙女

早乙女や喜びし追ふ立植ゑ　不染

早乙女の中にもおのが友らしく　松什

早苗

植かへ見て植てもなほ早苗かれ　出雲

手に取て多くのもの銭く早苗かな　宮蓮

紫陽花

紫陽花や咲さかりにも振る花　波梓

あぢさゐの花に植る株木かな　木谷

罌粟

かくしてや開かば散りゆく花さき　蓮流

植ゑてやまたせて涼の花ひとひ　秀雲

青梅　青梅の葉まぎるゝや一雫　梅旅

うれかけて青梅赤みの見えにけり　喜山

茄子　夕顔の苗や茄子は一夜漬　一具

大や数のよまれぬ程や茄子畑　鳥津

初茄子はいつも色乃かゝる家の前　家雲

若竹　若竹のなかりすましけり藪の上　錦妹

まつさきに家へ入れぬ戦きや若竹　山子

栗花　暮る日にむさ枝て侘や栗の花　戸儀

蘆花　ゆふやけと月の流るゝ蘆原の花　宗雪

萍花　萍のよるべたゞよふ宿の雨　祖白

瓜花　宿も月の夕ぐれしや瓜の花　宗好

胡瓜　蔓の葉をはしりの延びや一二寸　塩羽

蝉　秋待や名さへ無常も蝉の声　未成

日の暮るの加るや暮る蝉の声　月山

地よ松葉落て立けり蝉の声　大西

蝉なくや蝉の声ある滝の雨　都泉

松原や高く蝉なる峯の声　寄三

石鼓の声まよりてせゝ蝉の声　逸剛

水鶏

楼の国をのぞし燈の羽音かれ　瓢旨

木々ぬれ[illegible]　翠光

今宵こゝ八橋や橋や[illegible]　示識

[illegible]やむかしの[illegible]水鶏かな　双鳥

[illegible]水鶏かれ　木谷

[illegible]や[illegible]水鶏　宗屋

[illegible]水鶏かな　竹史

[illegible]水鶏の水鶏かな　鴉鵞

[illegible]舟の灯[illegible]水鶏　其声

[illegible]の月[illegible]水鶏　有芸

[illegible]や[illegible]水鶏かな　丁和

鴨の子

[illegible]や[illegible]の月　波静

[illegible]の子の[illegible]　松思

雁の子

[illegible]も一口[illegible]かれ　只西

三ケ月[illegible]雁の子[illegible]　峰雪

[illegible]雁[illegible]　松翠

火串

[illegible]も[illegible]や[illegible]　布山

[illegible]火串[illegible]　可山

羽抜鳥　又ふるも羽ぬけ鳥なり河原石　志三

浮巣　むらくもとつゝもつみし浮巣かな　西丘

粽　ちつりや粽こくるもむつまじき　希丘

ものかゝる結ひ目のうへ粽かな　和流

雉子　かくしくや青紫のさける拂雲　西丘

娘るや孫他もちまきちらひ　立宇

単梅　青梅花とりて見ゆひくろの　山方

辻ヶ花　結ちくの袂きくれあり辻ヶ花　出水旗

羅　うすものや仕立て何年着て石紀　石古

加茂競馬　嵐ろうと出かふのうち勝競馬かな　素石

六月　六月の空を焼きや乙乃川　松宝

氷室　氷の寄せて松の八様くり氷の貢　山子

むかしも今もよきを氷室かな　為山

暑　よも隔も扇て出ぬまつあつさかれ　寸古

道さ日や扇ろんせの雅の声　旭桐

涼み涼しく山家の竹つきるよ　圭史

納涼

涼みけり山も目の前一つ岩の上　周那

橋も見ん舟に涼しきあつさかな　西枝

竹に風ふくゆふべも暑さに出かな　木谷

入海へ腰かけて居る暑かな　有隣

きりぎりす扇もつらし宵の雨あつさかな　英糸

町はづれ暑さ払ふや御手大門　石竹

我れ木のかげをすずみにさそひけり　徳年

あまたり網ふりあげて納涼かな　素存

炎も涼しき汐の流れ涼しかな　淀川

隣しらぬ人の夕すずみ　芹雪

戸を出や新たにしたし涼かな　鶴扇

涼しさにいかれもせぬ御舟　布丈

竹を新たに涼しき夜もすがら　梅雅

月涼し夜明人のはしらす家　和流

月涼し橋をつたふ流かな　此葉

青嵐

松ふかいは常にたちやまぬかし　春丘

大日枝の杉ゆかりて青嵐　露舟

濡ほせる舟のおもてや青あらし　其風

青嵐草木はふりて家に入　山方

梅若葉や柳にあをあらし　南く

雲の峰

江のうへや帆もおよんて雲の峰　渡鳥

よき風のさそふて遠し雲の峯　菊園

船の上ハ波なり雲の峯　春丘

東西の風も絶えし雲の峰　滄川

瀬の音れ枕をなかれする雲の峰　蘭花

かけよる田の中の道や雲の峰　世岐

来り見し山男坂越しつや雲の峰　曲年

夕立

ゆふだちの枝や庭への白き露　山方

夕立とよけて見るや市の中　有信

晴て来て又ふる夕立かな　蓬堂

清水

ゆふくれやつるへを何も出の清水　嵩角

逢ふ人も遠しくしられ　松出

禁まして扱をなくしも清水かな　六大

二村へ名のかはり行しるしなる　宮富

さゝ溝やりうりや木の谷清水　研花

清さて田へ引りや山清水　粉洲

清水をくみしつるて清しき　淡妹

月さして清き岩の清水かな　桀堂

汲て来て清水飯前の水かな　月山

清水ハ清水ハ清水かな　杵爽

竹婦人

竹婦人あるか中に背中あはさるれ　一具

心細き思ひきるころや竹婦人　栄古

夏月

明はなれ見て夜ぞ月　嵐雨

御座くるも明る樽のふたや夜の月　柏石

漕出る舟うき空田の海老や夜のとき　柳塘

かすかの鉢までや夜乃月　月庵

夜あかれや名のみあふて月をむく　松竹

風薫

碧中行小川や風の薫るかな　幸水

土用干

来会しきものを干すや大角干　桜山

嘉定喰

交ならぬ人とかはるや嘉定喰　為よし

秋近

杜き一思ひけり秋の涼まんう　瓢

蓮

一明や蓮の花けり紫をまくる　鳥谷

白蓮の大きれて見る涼しされ　杜水

香飾かゝりて花見る蓮の露　猶舟

その為けもちきに目出度や蓮の花　飛帝

面たゝましえしや蓮の露　杢風

家なるうちよぶにかゝ秋の蓮の露　如流

きらりしと咲く花や蓮花しく　玉芝

葉の上や池の蓮るゝもちるかなつ　鄉翁

晝皃

[illegible]の[illegible] [illegible]を[illegible]く　鉄池

[illegible]の[illegible]や[illegible]池の露　[illegible]烏

[illegible] [illegible]の[illegible]かれ　幸水

[illegible]の[illegible]や[illegible]　[illegible]

[illegible] [illegible]かれ　[illegible]流

青田

[illegible] 竹の[illegible]青田かれ　一[illegible]

[illegible]青田哉　松[illegible]

凡

[illegible]や凡の冷　百[illegible]

凡つらり凡を[illegible]　[illegible]

葛花

[illegible]葛の[illegible]　[illegible]

[illegible]葛[illegible]　[illegible]

百日紅

[illegible]日紅　[illegible]

[illegible]　[illegible]

灯[illegible]

[illegible]　[illegible]

川[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

川狩　川狩の上を飛ゆく鷺の声　杉経

川狩を立(?)し挿(?)て通る人もなし　梅泉

川狩や連まつうちの中通り　陸山

葛水　葛水や緑に流しや雲　山方

葛水や若葉てやまる旅の夜　晋均

葛水や深山にふ(?)沢のつく　為山

心太　心太よりも長(?)き人　素三

心太にことへてみつかる(?)心太　一徳

一夜酒　山里や夕しぐれて一夜酒　甘古

祇園会　祇園会や御旅の前の人涼し　翠斉

雨乞　雨乞の声も嬉しき木の鐘　吉凡

御祓　御祓さらりと流して祓　詠久

川社　川社しらぬ月にさ(?)肩を　川社　南よし

茅の輪　桜まで(?)うしろ(?)茅の輪　南之

雑

うちみて(?)立し(?)やまり風車　季風

ゆふる葉の(?)名先静(?)しなの山　宗可

6271
36. 3. 14